

郷土室だより

八町堀襟記ざつ き 八

安藤 菊二

○白河藩江戸屋敷について

白河藩八町堀藩邸の絵図面は現存せぬよう
なので、すべてが不明であるが、八町堀邸内
には、藩校立教館の分校が置かれていたよう
なので、藩校について一言する。資料は、近
藤奎先生著『桑名市史』に抑ぐ。

『桑名市史』の記述に従うと「藩祖松平定
綱つとに儒学を好み、寛永一二年（一六三三）
始めて桑名に就封すると、朝日丸に学校を設
け、三宅正堅（号担庵）を聘して藩子弟の教育
に当らしめた。正堅は藤原惺窩の門人堀正意
（号杏庵）の高弟で且つ女婿である。後百余年、
寛保元年（一七四一）定賢公の時奥州白河に移
封すると、又その地に学校を設けたが、体制
は未だ完備にいたらず、天明三年（一七八三）
定邦の養嗣定信が、田安家より入って襲封す
るにおよんで、寛政三年（一七九一）会津二番
町の旧学場を拡張して立教館と称し、学校奉
行、教授、学頭および学校目付などにおいて、
大いに文教を皇張した。当時の教授は本田東
陵・広瀬蒙斎・片山恒斎であった。」という。
文政六年（一八二三）定信の子定永の時に桑名
に復封されると、旧領主松平下総守建立進修
館を継承して、学校を伊賀町に置いて校名は

立教館の旧に復し、蒙斎の門人南合果堂・鈴
木嶋庵らを教授として、力を学事に致した。

立教館の校則によると「藩の子弟士分以上
の子弟年令九才迄は、必ず藩校に入り、先ず
童蒙訓（立教館制定）の教課を受け、一五に達す
ると、必ず武術の科を修めることが定めら
れていた。中でも柔道は必習科目で、これを
学ばない者は、武術部の登用に当って、その
及第点を減らされた。」という。

「生徒就学の年期は通例八・九才をもって
素読科に入り、一三・四才で対読科、一六・
七才で独看科に進み、一五才より旁ら武術の
一科（剣術）を兼修し、
一六・七才より更に槍
術或は柔術等の二・三
科を兼修するのを常と
した。」

江戸の藩邸学校は、
八町堀藩邸内にあり、
江戸詰藩士の子弟の教
育を行った。学頭一名
その他句読師、殿講、
学校諸講義、生徒会業
など、白河と大同小異
で、絶えず本藩の教授
学頭中から勤番を派し
気脈を通じていた。

以上の『桑名市史』
の記述によって、我々
は、僅ながらも白河藩

（後の桑名藩）邸内の模様を想い見るこ
とができる。

もっとも、田安賢丸（定信）が、白河
藩松平家八世定邦の養子嗣に迎えられ
て、ここ八町堀藩邸に入ったのは、安
永四年（一七七五）のことであるから、
そのころは、ここ八町堀藩邸には、ま
だ立教館の分校は建っていないかたこ
とは言うまでもない。

○亜欧堂田善

白河藩のことを調べていて、司馬江



亜欧堂田善像 田一筆（石井清吉氏蔵）（『絵画叢誌』より）

漢と並んで、わが国初期洋風画家として、その名を美術史上に留める亜欧堂田善が、江戸の八町堀と密接な関係を持つていたことを知った。

田善の画業については、すでに沢村専太郎氏の『日本絵画史』所収の労作を初めとして、西村貞氏の『日本初期洋画の研究』の「亜欧堂田善とその門流について」、更には岡本千曳氏の『紅毛文化史話』の「亜欧堂田善とヨハン、エアース・リーディング」などの研究があるのであるが、手近の所にそれがないので、孫引を重ねることになるが、京橋図書館所蔵の『福島県史 20、文化1』によってそのあらましを記そう。

田善の家系のこととは直接関係がないから省略して、同書の記述に従って記すと、田善は永田氏、名は善吉。修して田善と称した。岩代国（福島県）須賀川の染物屋に生れ、幼少から画が好きで、たまたま祖先出生の地伊勢に月僊という画僧がいることを聞き、抑慕の心止みがたく、安永元年（一七七二）五才の時、土地の人と伊勢大廟に参詣し、初めて月僊を訪れた。天明五年（一七八五）東海遊覧かたがた再び伊勢にいたり、月僊に会い門人となった。月僊は後、寺院再建勸化のため諸国を行脚し、途中須賀川に脚を止めて画筆を

執った。そんな関係から、須賀川には今もなお、月僊の絵が多く残っている。以下県史の記述を借りる。

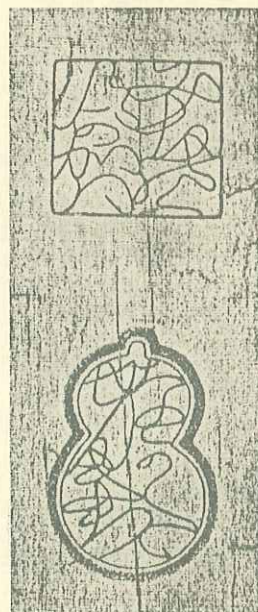
寛政六年（一七九四）九月、藩主松平楽翁は領地巡回のため、画家谷文晁、書家千里啓らと須賀川を訪れ、安藤三郎右衛門宅に小憩した。その家にあった「江戸芝愛宕山図」屏風（は澤世絵風）が、永田田善の筆ときき、直ちに田善を召し出し、これを賞賛した。田善が楽翁や文晁を知ったのはこの時からである。同八年楽翁は白河城に田善を召し揮毫を命じた。ちょうどそのとき枕時計がこわれた。

田善はさっそくこれを修繕したので楽翁はそのすぐれた技量を知り、扶持を与え、白河の会津町に屋敷を与えた。田善も白河藩に仕える決意をし、家業は松浦屋庄助にゆずり、名を永田太仲と改め白河に住した。太仲四九歳の時である。

寛政一〇年（一七九八）楽翁は江戸にいて、田善に出府を命じた。急いで上京すると、楽翁は先年オランダから將軍に献納、將軍から楽翁が受領した銅版世界万国を示し、「お前は絵をよくする一方技術にも長じているから、この銅版の術をくふうしてみよ」と命じた。田善は銅版画は洋画技法を主とするので、まず洋画を学

ぶ必要があると考え、楽翁の許しをうけ、寛政一一年（一七九九）ひそかに長崎におもむいた。そして四年間消息をたつた。この長崎行にさまざまな説がある。ひそかにオランダに渡航して銅版の術を学んだともいい、長崎に住み洋画や銅版術を学ぶかたわら楽翁の隠密として海外の事情を調査報告する役目をもっていたともいう。

要するに、田善は隠密とか海外渡航といふことはなかったにしても、常に海外事情や国際動向を彼地で調査これをそのつど楽翁に報告したことはわかる。これは進歩的な憂国の政治家として、楽翁が当然とった処置であらうし、田善もその請託にこたえ、よくその大任を果たしたものとみてよい。享和二年（一八〇二）田善は長崎から帰り洋画技法と銅版画法修得を詳細に報告、直ちに銅版画の製作に着手、さきの世界地図の複製や数種の画図を製作した。楽翁公大いに喜び、

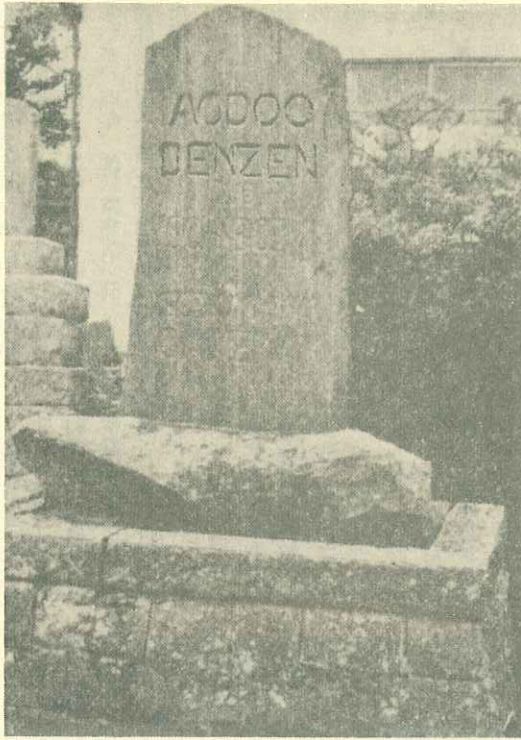


先年日本に文字を彫りたる者有之趣き承り居り候共、画刻したるは田善に限る。即ち日本草創ともいうべく、実にかの世界図の如き、亜欧両洲目前にあるの心地す。是より亜欧堂と可称被仰下。といい、禄高を増し、その労をねぎらった。云々

（福島県史20、文化1、五一頁）

田善が銅版画を誰に学んだかは、不明である。司馬江漢に学んだというのは臆説だといわれているし、長崎に遊んで洋画を研究したというのも疑わしいという。『桑名市史』（上巻、五七四頁）は、「田善の銅版画は、シヨメール百科全書所載の西洋流腐蝕法によるところが多いが、それを基にして、備中（岡山県）松山藩士より伝えられたという、腐蝕地に漆を用いる特殊の方法を用いた」と記している。

なお、田善の銅版画法については、



亜欧堂田善碑 (須賀川市北町長祿寺)
(『福島県史3 近世2』より)

『福島県史、第21巻、文化2』に次のような詳しい記述がある。

田善の銅版製作法を簡単に述べると最初に銅版を平らに伸ばし、これに薄く漆を塗る。この上に下画をはりつけ、彫刻用具でその下画を漆の上に書き写す。この銅版を銅腐蝕液にひたすと、書き写された下画の部分の漆だけが取り除かれていくから、その部分だけ銅版が腐蝕され、下画の通りの腐蝕が銅版上に残る。こうしてじゅうぶん腐蝕された銅版は、腐蝕液を洗い流し、漆を取り除き、さらに不鮮明な個所があれば、彫刻

刀などで修正して銅版を完成する。田善が銅版画を始めたころには、銅版製作法は広く蘭学者などの間には知られていた。

西村貞の『日本銅版画志』によるとショームールの百科全書の中の、銅版画に関する項を大槻玄沢が訳し、その方法にもとづいて、司馬江漢が『地球全図略説』をはじめ、多くの銅版画を製作しており、宇田川榛齋は『銅版図蝕鍍法和蘭エツツェン』を訳述していた。榛齋は、その著書『医範提綱』の付図を田善に依頼しており、二人の間には親交があったも

のと思われる。このほか、松平定信も『退閑雜記』のなかに銅版画製作法を述べている。司馬江漢は銅版画製作については、門下生にも秘密にして伝えなかったほどであるが、田善は、宇田川榛齋・松平定信などを通じて、銅版画製作法を知り得たとも思われる。

しかし、田善は製作にあたって、彼独自のくふうを加えている。まず、銅版を平らにしてから、それまでのオランダから伝えられた「ろう」を主体とする塗料のかわりに、日本産の漆を銅版に塗った。漆は腐蝕液にも強く、また、下画を書き写す際「ろう」のようにくずれず板面がきれいに仕上がる利点があると考えられる。つぎに、彫刻用具として点線器、彫刻用のコンパスなど、それまでの用具と違ったものを使用している。田善が使ったという彫刻用具は、いま須賀川市の高久田金三郎宅に所蔵されている。

腐蝕液には、これまでと同様丹礬(硫酸銅)に鼠糞をまぜて煮つめたものを使用していたと伝えられている。印刷用の墨汁は骨炭(三味ばち片を焼いたもの)を桐油にとかしたものを使用し、印刷のために押圧する

器具を備えていた。このようにして作られた田善の銅版画のうち、理学関係の作品には次のようなものがある。

- 1 「医範提綱附図内象銅版図帳」文化五年(一八〇八)作。この作品は宇田川榛齋が西洋医学を訳述したものに、田善が内臓諸器官の銅版画をつけたもので、当時の医者の間では西洋医学の必携書とされていた。
- 2 「新鑄総界全図並日本辺界略図」文化六年作。(中略)
- 3 「新訂万国全図」文化七年作。(中略)以上のようにして始められた田善の銅版画は、当時の蘭学者宇田川榛齋、高橋景保、伊能忠敬などの仕事に、大きな力となったのである。

(福島県史21、文化2、一七二―三頁)

万国全図は製作部数の関係から、伝存するものはきわめて稀であるが、幕府に献上された一図は、内閣文庫に珍藏せられている。保存の好い鮮麗な地図だという。

○銅版世界図の印刷

田善の銅版印刷による世界図の製作は、田善の銅版技術完成を待って、文化四年頃から開始されたごとくである。肝腎の原因がまだでき上がっていなかった、その試作品として、小型の銅

版図「新鑄総界全図」と「日本境界略図」が印刷された。流布すること稀なので、記述した書物もほとんどないらしいが、昨年、雄松堂書店が刊行した福井保氏著『江戸幕府編纂物』に適切な解説がある。

この小型銅版図印刷の経緯は、二図の序跋によって明らかで、印刷の成ったのは文化六年の後半期に入ってからであった。同書によると『新鑄総界全図』は、匡郭内、縦二〇・八寸、横三二・三寸。『日本境界略』は匡郭内、縦二二・三寸、横三四寸、料紙の長さ七〇寸。その前後に上掲の序跋(ここに省略)を付刻してあるので、料紙全体の長さは約九二寸である。紙高二三・五寸。

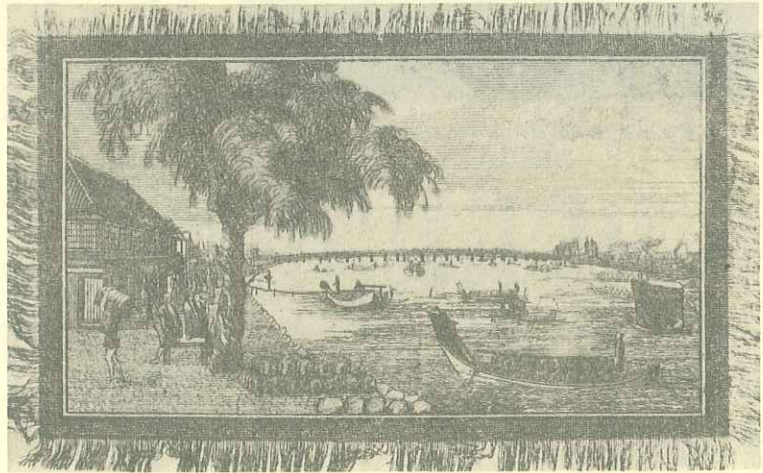
新訂万国全図(天文方(高橋景保等)撰)の成立。幕府は文化四年十月に、天文方高橋景保に命じて新たに世界地図を調進させた。当時、英・米・露艦が通商貿易を求め、または捕鯨のため日本近海に來航するに伴い、国際情勢の把握や外交政策立案の基礎的な資料として、幕府は、最新・詳細・正確な世界地図を必要とした。景保の作った本図はよくこの要請に應えるものであって、わが国最初の精密な近代的世界地図が完成した。……編集資料に用いた西洋地図の地名等

を翻訳するために文化五年三月、長崎の和蘭通辞馬場貞由が抜擢されて江戸に招致された。貞由二十才の時である……文化四年十二月に幕命をうけてから約三年を調査研究に費して、文化七年三月ごろに完成した。……

完成した『新訂万国全図』は、松平定信の手許にも届けられたはずであるが、桑名の松平家に、この地図は伝存していないらしい。ことによると、後述の文政一二年の大火の際滅びてしまったのかも知れない。惜しむべきことであった。

田善の作品目録は、油井夫山氏が編成して『浮世絵世界』昭和十一年十二月に載せたものが、『福島県史21、文化2』に収録してある。我々が驚くのは、田善の銅版画のほとんどが、還暦を過ぎてからの作品だったということ、このことは注目されてよい。

田善は、松平定信から扶持を受けて、

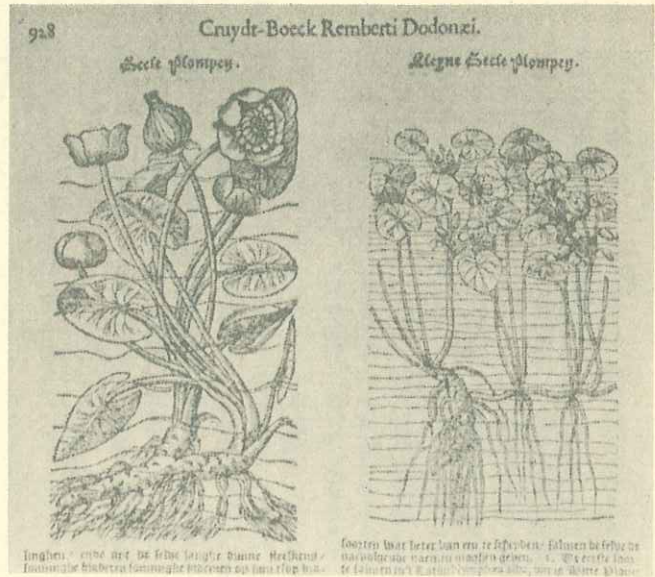


田善 兩國勝景 (『原色浮世絵大百科事典』より)

った『貼込帖』で、中良が文化元年に装釘を加えたもの。その第一帖の終りに近い部分に、田善鑄の小形江戸名所図二〇枚が貼ってある。別に、その内の「愛宕山」一葉と、署名はないが、田善らしい中形銅版の「東叡山之図」一葉とが、桂川遺品中に現存することは、田善と桂川家、ことに中良との深い交渉を物語る一つの材料とはならないであろうかと、今泉氏は慎重な発言をされる。(同書二五頁)

今泉氏によるとこの貼付の銅版江戸図江戸名所図連作は、各曲尺二寸七分から二寸九分。横四寸二分五厘くらいで、その題目を掲げると次のごとくである。

- (一) 東都名所全図 (二) 桜田馬場射御之図 (三) 愛宕山眺望之図 (四) 愛宕山二
 - (五) 日本橋魚廓之図 (六) 自斜橋聖堂眺望之図 (七) 自駿河台水道橋眺望 (八) 自上野山下 (九) 自大槌屋後後臨臨不忍
 - (十) 万年橋大橋上橋勝景 (十一) 豊岸島湊之図 (十二) 仙島真景 (十三) 三俣真景
 - (十四) 二州橋夏夜之図 (十五) 三田眺望之図 (十六) 真洲先稻荷隅田川眺望 (十七) 今戸瓦
 - 煙之図 (十八) 吉原大門之図 (十九) 新吉原夜
 - 俄之図 (二十) 自道灌山望鴻台之図
- なお今泉氏は付言して「以上は、中良の貼った順にしるし、番号は筆者が仮につけた。このほか、この帖の間に



ドドネウス Cruydt-Boeck (東京国立博物館蔵)
 (『日本博物学史』より)

四愛宕山二とまったく同一の図が、挿まってあった。もっとたくさんほかの図もあったものと思うが、百数十年の変遷中に散逸し、たった一葉残ったのもあろう。」といっておられる。

今泉氏はこの後に、田善の長崎伝習説、長崎伝習説否認と森島中良の立場などの項目を立てて説かれる所があるが、これ以上の言及は避ける。同書には、惜字帖に貼られた二〇枚の田善の銅版画全部が載せてある。

からざるにいたり、幕臣桂川甫周の弟森島中良および、長崎の通辞石井庄助を招聘して大いに西洋事情の吸収に努めていた。『桑名市史』は、

公が北門の警備その他隣邦との国交に心を用いたことは意想外で、子爵松平家に伝来する公の外交関係の秘録は数十部に達する。これを騰写したものが、文化五年(一八〇八)に総計四十八卷(後年更に追加)となり此集披閱の次序を定め、且つ之に由

○遠西草木譜とその焼亡

松平定信が老中首班として、内治に専念している頃ロシアの船はしきりに北辺に出没して通商を求め、対外交渉もないがしるにすべ

て研究する際の注意事項を叙した秘録大要一巻が作られている。(同書五六頁)

といい、前記石井庄助、旧名馬田清吉は、天明六年(一七八六)江戸に来て、侯の命を奉じて『遠西軍器考』七巻を撰し、部を器械・攻守・戦闘・兵陣・舟車橋梁・城廓・哨堡・陣營の諸部に分つて考説している。

と記している。もつて公が、沿海防備に新知識を取入れんとしていたことが窺われる。しかして、同書は、石井庄助が、公命によって、ドドネウスの博物書を訳して『遠西本草攬要』と名づけたと記すのが、大いに私の注目をひく。

久しい間官庫に眠っていた。八代將軍吉宗は、官庫へ入るたびに眼につく、この和蘭献上本を読み解く者はないものかと思う。ついに、禁令を解除して、青木昆陽にオランダ語の研究を命じ、本草学に詳しい奥医師の野呂元丈に、ドドネウスを解説する大役を命じた。大命を拝した元丈はその翌年から、参府の甲比丹をその旅館石町の長崎屋に訪ね、通辞を介して質疑を重ね、寛保二年から八年をかけて、『阿蘭陀本草和解』八冊を作った。

ドドネウスの『草木誌』から合計百五種だけの植物記事の抄訳をこしらえたわけである。ドドネウスにはこうした歴史があった。しかし浅学の私はその原本について知る所はない。

よつて、私は、京大教授上野益三先生の大著『日本博物学史』によつて、その書の大要をここに託すことにする。

ドドネウスの『草木誌』は、万治二年(一六五九)三月江戸参府のオランダ甲比丹ワーヘナルが持参して將軍に献上したものである。当時の当局は、本書の価値を理解できず、挿図がもっと大きくて美しい本を寄越してくれと注文したという。この要望に應えて、五年後の寛文三年(一六六三)三月、参府の甲比丹インダイクが持参したのが、ヨンストンの『動物図説』であった。

ドドネウスとヨンストンとは、江戸時代に最もその名の知られた博物学書であったが、如何せん、誰もこの蟹行蚊脚の横文字を読むことができぬまま

ドドネウス(Reinbert Dodonaeus)は、ベルギー生れの医師で、植物学者だった。その著書『草木誌』が万治二年に我が国にもたらされたことはすでに説いた。上野教授によると、ドドネウスの『草木誌』は、一五五四年にフランダース語の初版および仏訳本が出、一五七八年にはライオンに英語版がロンドンで刊行

された。日本に入った蘭語訳は、一六八八年と一六四四年のアントワープ版で、大部分は後者である。

二折版一四九二ページ、全三十篇(巻)の合本になり、二〇〇〇簡以上の木版の植物図を載せる。巻末にインドおよび異邦の薬用植物を附録とする。第一編が総論、第二十三十篇が各論で、各植物をアルファベット順に排列し、名称・形状・産地・開花期のほか、性質や効用を記述する。……その成立期をほとんど同じくする李時珍の『本草綱目』の内容とよく似ている。

同書によると、本書の主任翻訳者石井が中道で没したあと、栗翁公は、田安侯の侍臣吉田九(市正恭)を起用して、その修定と未完成部分を翻訳させて、羽栗費(後、名古屋藩医、天保一四年没)をして補訳し完成せしめた。完成した『遠西草木誌』は、全巻冊数一七〇冊を越えていた。公は着々その出版の手筈を進めておられたのに、何とした不幸か、文政一二年三月二一日・二二日の大火で、栗翁公の八町堀上邸も、蛸殻町の下邸も、浴恩園までもが一時に焼亡するという大災厄に見舞われ、『遠西草木誌』の訳稿も版木も大部分が灰燼に帰してしまつた。

上野氏の『日本博物学史』に、

焼失当時、原稿のほか、新刻用版下、でき上つた版木、新刻本などが相当数あつたらしい。現存の残巻(早稲田大学図書館蔵、二一冊)には、印刷本、版下ならびに原稿が混在している。もしも、この翻訳がこのような炎禍に遭うことなく、無事全巻が刊行されていたならば、わが博物学史上、不滅の事項となつたであらう。

(同書四九八頁)

と言つておられる。真に惜むべき文献の喪失であつた。

○喜多武清

画家。通称栄之助。字子慎。可庵と号した。文化十二年版『諸家人名録』に八町堀地蔵橋通、天保七年版に八町堀竹島と註する。会日は四九。始め業を谷文晁に受け、山水を善くし、草花に妙を得た。「おあん物語・おきく物語」。絵本勲功草二巻(山崎知雄輯)などの挿絵を画いている。

喜多武清については、漆山天童氏が大正五年四月『浮世絵』十一に寄せた「余の好きな絵入本」の中で次のようなことを記しておられる。

喜多武清の『優曇華物語』(文化元年刊)これは少し問題だ。作は京伝。武清のものは外に彩色摺で『絵本勲功草』『歌仙絵抄』『可庵画叢』な

どがある。又彩色摺ではないが、朝

川鼎蔵梓の『おあんおきく物語』を華山と二人で画いて居る。嘗て本誌第六号に宮武外骨氏が『喜多武清に対する悪声』という題の下に述べられし如く、当時の世人より種々非難されし武清の画が、余を以て見れば『勲功草』は石田友汀をも凌ぎ、『歌仙絵抄』は訥言にも劣らじ、『おあんおきく物語』は華山と肩を並べ、『可庵画叢』は探幽に彷彿たるものだ。それに何ぞや、『翟巢漫筆』や『諸家必読出放題』に、不器用の筆の、浮世絵師には遙に劣りたる者に鄙て凡見るに堪へざるなりなどある由。『優曇華物語』の画などは当時の愚物共にはわからないのだ。云々。(日本書誌学大系33、近世の絵入本、八頁)

武清は安政三年一月二〇日没し、芝区二本榎の清林寺に葬られた。墓石水鉢台石に「来て見れば二本榎もおもしろし、咄の友は其角一蝶」と刻まれていると、結城素明氏の『東京美術家墓所誌』に記してある。

武清についてはあまり記すべき事もないので、以上で打切るつもりでいた

ら、東京市史稿市街篇第四十三冊、嘉永四年一月の条に、この月一〇日、日本橋万町の柏木亭で催された尚歯会に、七六才の武清の出席している記事

が見当つた。

同年十月十日於日本橋万町柏木亭、尚歯会有之。青木左飯田閻輔十歳、京家来七歳、藤藤彦磨八十四歳、山本京山八十三歳、月窓七十六歳、武清七十六歳、綾瀬七十三歳、一具七歳、右梅本為山催之云々、統泰平年表一嘉永四年に七十六才とあるから、亡くなつた安政三年には八一才。当時としては、かなり長命だったことが知れた。

◇東京を語る会 第45回

日時 六月二十九日(土)

午後二時~四時

演題 八丁堀組屋敷と

与力同心の住まい

講師 中村 静夫 氏

(中村地図研究所)

テレビや映画でおなじみの「八丁堀」の与力同心の住まいについて、中村氏作製による地図を軸にお話を伺います。

中村氏はまた、国立歴史民俗博物館の共同研究員として、「江戸橋広小路復原図」を作製するなど、ユニークな地図作りの活動をおこなわれています。

当日は中村氏作製による各種の地図の展示も行ないます。

お誘いあわせてご来場ください。